



大学院だより

大学院修了式

2026 年 3 月 12 日、2025 年度大学院修了式が血脇記念ホールにて学部 131 期生の卒業証書授与式と合同で行われました。修了者の 1 名ずつの呼名により入場し、36 名の修了者の代表として生理学講座の倉島竜哉大学院生に阿部伸一大学院研究科長から修了証が授与されました。その後、新館 11 階に移動し、一人ひとりに修了証が授与されました。また、大学院研究科長賞が倉島大学院生に阿部伸一大学院研究科長から授与され、同窓会長賞が倉島大学院生と歯周病学講座の森心汰大学院生に富山雅史同窓会長から授与されました。



2026 年 3 月 12 日大学院修了式後、修了者一同



修了証を手にした修了者一同



修了者と、修了者の父兄の方々に祝辞を述べる 富山雅史同窓会長



論文投稿など今後すべきことについて鼓舞する澁川義幸大学院教務部長



達成感で満たされました。



快晴の空、よき日になりました。



みんな一緒に頑張った！



大学院修了者謝恩会出席者一同



大学院修了者謝恩会にて祝杯

大学院研究科長賞

本年の大学院研究科長賞は、生理学講座の倉島竜哉大学院生が受賞し、阿部伸一大学院研究科長から賞状と記念メダルが授与されました。

- ・倉島竜哉大学院生受賞テーマ

Functional crosstalks between Piezo1-TRPV1/TRPA1 channels via intracellular arachidonic acid cascade in odontoblasts.

同窓会長賞

毎年恒例の同窓会長は、倉島大学院生と歯周病学講座の森心汰大学院が受賞し、富山雅史同窓会長から、賞状と金一封が授与されました。

- ・倉島竜哉大学院生受賞テーマ 同上

- ・森 心汰大学院生受賞テーマ

Therapeutic potential of local application of fibroblast growth factor-2 to periodontal defects in a preclinical osteoporosis model.

この4年間があってよかった

生理学講座
倉島竜哉

大学院の4年間は間違いなく、貴重な経験の連続でした。1年次の学長奨励研究助成への挑戦、2年次の国際研究会への参加、3年次の大学院 Elective Study への参加、4年次の歯科基礎医学会でのシンポジストとしての発表など、さまざまな経験を重ね、その度に成長できたと自負しています。大学院修了式で澁川義幸先生に名前を呼ばれ、返事をして登壇した刹那、心の底から「この4年間があってよかった」と感じました。

数々の経験をさせていただきましたが、大学院生として最後の手記では、これらの経験の礎となった日々の研究生生活について述べたいと思います。

私は、象牙芽細胞に発現するイオンチャネルの機能関連メカニズムと、その細胞機能への関与について研究を行いました。急性単離した象牙芽細胞を用いた *in Vitro* 実験と、象牙質知覚過敏症モデル動物を用いた *in Vivo* 実験を組み合わせることで、象牙芽細胞機能の一端を明らかにすることができました。

しかし、研究生活は決して順風満帆なものではありませんでした。研究には失敗がつきものです。特に苦労したのは、象牙芽細胞を微小なガラスピペットで押して機械刺激を加える実験でした。研究を始めた頃は、ガラスピペットで細胞に触れただけで細胞が死んでしまうことが度々ありました。細胞の培養方法に問題があるのか、使用している試薬に何か混入しているのかなど、失敗の要因となる可能性を一つずつ検討し、消去していきました。しかし、実験手順を細かく確認しても問題は見つからず、最終的には、自分の実験手技の未熟さが原因なのだろうと考え、ひたすら実験を繰り返しました。

澁川先生が仰っていた「自分で苦労して、苦労して、苦労して、苦労して、苦労して、苦労してデータを取ることが大事なんだよ。」という言葉は、一生忘れることはありません。自分は実験が下手だからデータが出ないのだと落ち込むこともありました。しかし、その度に澁川先生の言葉を思い出し、踏ん張ることができました。その経験もあり、4年次に同様の実験を行った際には、1週間ほどで必要な数のデータを取得することができました。自分自身の成長を実感し、嬉しく感じた瞬間でした。

また、大学院在学中にいくつかの学会で受賞をさせていただきました。第79回日本口腔科学会では、本学生理学講座で同じく象牙芽細胞研究を行っている木村麻記先生、そして大学院同期の窪山裕也大学院生とともに優秀ポスター賞を受賞することができました。とても嬉しかったことをよく覚えています。

大学院1年次の学外セミナーで齋藤淳先生より「東京歯科大学ひいては歯科界を牽引していけるような研究者になれるように」とのお言葉をいただきました。あれから4年経ち、歯科界を牽引する人材になれたかと自問してみました。正直に申し上げますと、まだ道半ばです。これからは「この分野と言えば東京歯科大学の倉島だ」と言われるような研究を積み重ね、歯科界をリードする研究者となれるよう、研鑽を積んでいこうと決意しています。

また、私は2026年度4月より助教として生理学講座の一員となり、教育にも責任を伴う立場となりました。大学院生活の中で諸先生方からいただいた御指導を忘れることなく、より一層気を引き締めて精進して参ります。何卒、御指導のほどよろしくお願いいたします。

最後になりますが、御指導くださいました澁川義幸先生、前大学院歯学研究科長の齋藤淳先生、大学院歯学研究科長の阿部伸一先生、大学院学生部長の福田謙一先生、大学院事務の堂地一利様、そして関わってくださった全ての教職員の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。



指導していただいた生理学講座の先生方と一緒に研究した大学院生たち



澁川教授を囲んで、笑顔の終了式になりました。

大学院修了にあたって

歯周病学講座

森 心汰

大学院での日々は、長くもあり短くもあり、大変充実した4年間となりました。大学院入学前は、研究とはどのように進めていくものなのか、十分に想像することができませんでした。そのような私が、多くの先生方の御指導のもと、無事に博士課程を修了できたことを大変嬉しく思っております。

私は歯周病学講座において、歯周組織再生のメカニズム解明を目指した基礎研究に取り組んでまいりました。具体的には、骨粗鬆症状態における歯周組織治癒に対して、塩基性線維芽細胞増殖因子（FGF-2）の局所応用が及ぼす影響について、*in vivo* および *in vitro* の両面から検討いたしました。歯学部時代は、与えられた知識や選択肢の中から正しい答えを導くことが中心でしたが、大学院では、明確な答えのない課題に対して、自ら問いを立て、考え、検証していくことの難しさと面白さを学びました。なぜその現象が生じているのかを深く考える姿勢は、研究のみならず臨床においても重要であることを、日々の経験を通して実感いたしました。

齋藤教授をはじめ、多くの先生方の御指導のもとで研究を進めることができ、研究成果は国際誌 *Bioengineering* に掲載されました。また、得られた成果を学会等で発表する機会にも恵まれました。大学院在学中には、国内学会に加え、国際学会にも現地で参加させていただき、国内外の研究者の方々と議論する貴重な経験を得ることができました。これらの経験は、自らの研究を客観的に見つめ直し、今後さらに発展させていくうえで大きな糧となりました。現在も、これまでの研究を基盤として、歯周組織再生に関する研究課題に取り組んでおり、今後も研究成果を国内外に発信できるよう努めてまいりたいと考えております。

また、この4年間は研究のみならず、臨床、教育、講座内外の活動にも積極的に取り組んでまいりました。大学院生活の中では、思うように結果が得られない時期や、研究と臨床の両立に難しさを感じることもありましたが、そのたびに先輩方、同期、後輩の支えに助けられながら、一步ずつ前に進むことができました。研究をスムーズに行えるよう環境を整えてくださった口腔科学研究センター、動物実験施設の職員の方々にも感謝申し上げます。

まだまだ研究者・歯科医師として未熟ではありますが、伝統ある東京歯科大学で大学院課程を修了できたことを誇りとし、今後も歯周病学の発展に少しでも貢献できるよう、

日々精進してまいります。最後になりますが、これまで御指導いただきました齋藤教授、福田教授をはじめとする諸先生方、ならびに職員の皆様に、心より御礼申し上げます。



齋藤淳教授(中央)を囲んで銅冶賢吾大学院生(左)と森心汰大学院生(右)



同期の大学院生たちと

学位受領者一覧（2025 年度）

	学位記番号	氏名	所属	研究科 委員会	論文審査日付	
1	2 5 4 4	倉島 竜哉	生理	767	令和 7 年 3 月 5 日	甲 1688 号
2	2 5 4 5	銅冶 賢吾	歯周病	770	令和 7 年 6 月 1 1 日	甲 1689 号
3	2 5 4 6	森 心汰	歯周病	771	令和 7 年 7 月 1 6 日	甲 1690 号
4	2 5 4 7	今井 琴子	解剖	772	令和 7 年 9 月 1 0 日	甲 1691 号
5	2 5 4 8	田代憲太朗	保存修復	773	令和 7 年 1 0 月 1 5 日	甲 1692 号
6	2 5 4 9	設楽 沙月	歯科矯正	773	令和 7 年 1 0 月 1 5 日	甲 1693 号
7	2 5 5 0	牧野 将大	口腔インプラント	774	令和 7 年 1 1 月 1 2 日	甲 1694 号
8	2 5 5 1	瀧沢 寛律	口腔腫瘍外科	774	令和 7 年 1 1 月 1 2 日	甲 1695 号
9	2 5 5 2	西村 仁希	口腔顎顔面外科	776	令和 8 年 1 月 1 4 日	甲 1696 号
10	2 5 5 3	長谷川 陽	オーラル・病院歯 科	776	令和 8 年 1 月 1 4 日	甲 1697 号
11	2 5 5 4	小泉洋二郎	歯科矯正	776	令和 8 年 1 月 1 4 日	甲 1698 号
12	2 5 5 5	相磯 友里	口腔腫瘍外科	776	令和 8 年 1 月 1 4 日	甲 1699 号
13	2 5 5 6	林 真由子	歯科麻酔	776	令和 8 年 1 月 1 4 日	甲 1700 号
14	2 5 5 7	多田 優	歯科矯正	777	令和 8 年 2 月 1 8 日	甲 1701 号

15	2 5 5 8	福田 悠	歯科矯正	777	令和8年2月18日	甲 1702 号
16	2 5 5 9	深田 美緒	オーラル・病院歯 科	777	令和8年2月18日	甲 1703 号
17	2 5 6 0	鎌田 政一	クラウンブリッジ	777	令和8年2月18日	甲 1704 号
18	2 5 6 1	石川 早紀	口腔腫瘍外科	777	令和8年2月18日	甲 1705 号
19	2 5 6 2	秦 加純	オーラル・病院歯 科	777	令和8年2月18日	甲 1706 号
20	2 5 6 3	石井 大貴	社会歯科	777	令和8年2月18日	甲 1707 号
21	2 5 6 4	関矢日向子	歯内療法	777	令和8年2月18日	甲 1708 号
22	2 5 6 5	國府田尚暉	老年歯科	777	令和8年2月18日	甲 1709 号
23	2 5 6 6	蓮沼 和也	歯科麻酔	777	令和8年2月18日	甲 1710 号
24	2 5 6 7	上野 紗璃	口腔腫瘍外科	777	令和8年2月18日	甲 1711 号
25	2 5 6 8	星野 綾香	歯科矯正	777	令和8年2月18日	甲 1712 号
26	2 5 6 9	井野詩絵里	小児歯科	777	令和8年2月18日	甲 1713 号
27	2 5 7 0	宮本 聖	小児歯科	777	令和8年2月18日	甲 1714 号
28	2 5 7 1	蓮見 英哲	歯科矯正	778	令和8年3月4日	甲 1715 号
29	2 5 7 2	大友顕一郎	老年歯科	778	令和8年3月4日	甲 1716 号
30	2 5 7 3	井上 綾	歯科放射線	778	令和8年3月4日	甲 1717 号

31	2 5 7 4	清藤 友介	オーラル・病院歯 科	778	令和8年3月4日	甲 1718 号
32	2 5 7 5	窪山 裕也	小児歯科	778	令和8年3月4日	甲 1719 号
33	2 5 7 6	佐藤 佑香	オーラル・病院歯 科	778	令和8年3月4日	甲 1720 号
34	2 5 7 7	巽 綾香	口腔腫瘍外科	778	令和8年3月4日	甲 1721 号
35	2 5 7 8	薄場はるか	歯科矯正	778	令和8年3月4日	甲 1722 号
36	2 5 7 9	新村 佳大	口腔インプラント	778	令和8年3月4日	甲 1723 号

編集後記

本年の修了者たちは、御殿場での学外研修、卒業時の大学院研究科長賞や同窓会長賞の competition において、とても活発で高いレベルの競争が行われてきたという印象があります。多くの価値ある論文が東京歯科大学から発信されていくはずです。研究は新規性がとても重要です、すなわち、速さが運命を変えてしまうこともあります。修了者の先生方、熱いうちに論文を投稿しましょう。期待しています。

(福田謙一 記)